

【研究名】：抗てんかん薬血中濃度モニタリングの臨床的評価

【目的】

てんかん薬物療法における薬剤師の役割として、薬剤管理指導業務を介した患者さんのアドヒアランス向上への支援が必須ですが、さらに薬物療法における安全性を確保するためには、副作用モニタリングや血中濃度を指標にした治療薬物モニタリングが重要です。しかし、抗てんかん薬に関連する治療薬物モニタリング情報ならびに薬物の相互作用などに関しては、良く知られているものの、日常業務の有用性を総括的に評価した報告は少ないのが現状です。そこで本研究では、特に抗てんかん薬の有効濃度域の上限を超えた領域、いわゆる中毒域への到達を指標にして治療薬物モニタリングの日常業務の臨床的評価を試みます。

【方法】

対象患者は2011年1月～2013年12月に抗てんかん薬を投与し、血中濃度が測定された患者で、調査項目は年齢、身長、体重、性別、投与量、用法、肝機能検査値・腎機能検査値、基礎疾患名、薬物血中濃度です。

【研究意義】

中毒域に達する患者背景を解明することが、抗てんかん薬の適正使用につながると期待されます。

【研究内容】

抗てんかん薬を投与した患者さんを対象に、年齢、体重、検査値、薬歴などを調査します。

【研究期間】

2014年4月～2015年3月の1年間を予定しています。

【患者さんの個人情報の管理について】

厚生労働省「疫学研究に関する倫理指針」に基づいて患者さんのプライバシーを守るよう努めています。結果の発表や出版に際しては個人が特定できるような情報は掲載しませんので、患者さんの不利益となることはありません。

【研究実施体制】

愛媛大学医学部附属病院 薬剤部

教授 荒木 博陽

講師 田中 亮裕

副部長 田中 守

主任薬剤師 武市 佳己

薬剤師 渡邊 真一
薬剤師 武智 研志

就実大学薬学部
教授 末丸 克矢

【研究結果】

特定疾患に認定されている患者がハイリスク薬である抗てんかん薬を服用する場合には、血中薬物濃度が中毒域に達するリスクが高いことが推察されました。本研究結果は、就実大学薬学雑誌 第2巻 68-72 (2015) に掲載されました。